巻頭のことば

尾上正男先生は、昭和六一年に本学を退職されました。先生は本学の創設期の昭和四三年に教授として就任され、法学部長となられて法学部の発展に尽力されました。さらに昭和四九年に制定された学長選出規則により選出された最初の学長となられ、通算三期の九年間学長として本学の発展のために尽力されました。先生に対して深い敬意と感謝の念を表わすために、ここに私たちは先生の退職記念論文集を編集し、捧げたいと思います。

尾上先生は、戦前パルピン大学教授として満州の地へ赴任され、その後建国大学へ移られました。しかし臨戦体制下に入った昭和二〇年現地応召を受け、日本の敗戦によりシベリアへ抑留され、日本人捕虜抑留者の保護のため、彼等がすべて帰国し終わるまでの五年間その地に留まることを決意されました。極寒・辺境の地シベリアの狭い収容所の中ではありましたが、ロシア民族との接触を通してソビエト社会の現実の究明の姿勢をもち続けられ、昭和二五年の帰国後は神戸大学法学部教授となり、ソビエト研究者として大学に復帰されました。

観念的なイデオロギーや修辞学に落ち入りやすかった当時のソビエト研究者の中で、先生は、ソビエトの現実社会から遊離することなく、現実・理論・政策のダイナミックな関係を通してソビエト外交の分析をおこなわれました。ソ連社会が現在ペレストロイカという大改革路線をとるに至ったのは、それを必要とする現実をつくりだした社会的条件が長年のうちに蓄積されてきたからであり、当時からすでにその条件の萌芽は存在していたわけです。

先生のソビエト社会および外交の学問的分析は、そうした条件をすでに十分に指摘するものでありました。それはソビエト社会の現在の状況をすでに当時から推しはかることが出来るほどの歴史的に客観性をもったものであると考えられています。

帰国後の短い期間にその研究業績が次々と出版され、先生はわが国におけるソビエト研究の未踏峰を切り開かれソビエト研究の第一人者となられました。その間欧米にも出かけられ、各地のソビエト研究者との交流を深められました。とくに当時ソビエト研究の隆盛期をむかえていた米国では先生の研究が注目され、米国の大学や米国政府機関の研究所では高く評価されました。

こうした先生のソビエト研究から学問的刺激を受けてこの分野の研究を一生の仕事にすることを志した研究者は多く、彼等は現在各地の大学で中堅の研究者として活躍しています。彼等はわが国におけるソビエト研究の金字塔ともいえる先生の著書『ソビエト外交史』の初版本を今でも大切にしていると聞いています。

神戸大学退官後本学へこられてからは、外交史の講義を担当されると同時に前述のごとく学長として本学の発展のためにエネルギーを注がれました。多くの新設の大学の中で、本学ほどの急速な発展をした例はないといわれるほどになりました。またとくに若い研究者達が自由奔放に研究活動ができるアカデミックな研究のための環境づくりをしてこられました。

この気風を私たちは受けつぎ、教育と研究にさらに活気ある大学に発展させていく覚悟でおります。先生がますますご壮健であられることをお祈りいたしますとともに、いつまでも私たち後進をご指導下さいますようにお願い

申し上げます。

一九八九年四月

法学部長
谷口弘行